



フィンランドにおけるスポーツトレーニングセンターを利用したスポーツ活動の現状：
へき地地域における児童・生徒の運動・スポーツ生活のあり方を視野に入れて

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 北海道教育大学 学校・地域教育研究支援センター へき地教育研究支援部門 公開日: 2017-02-10 キーワード: 作成者: 小出, 高義, 越川, 茂樹 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00009999

フィンランドにおけるスポーツトレーニングセンターを利用した スポーツ活動の現状

～へき地地域における児童・生徒の運動・スポーツ生活のあり方を視野に入れて～

小 出 高 義

(北海道教育大学旭川校)

越 川 茂 樹

(北海道教育大学釧路校)

Present Situation of Sport Activities with using Sport training centers in Finland : View of Investigation of Pupil's Sport Life in remote area

Takayoshi Koike

Shigeki Koshikawa

概要

フィンランドにおける市民のスポーツ活動は多様である。市民はさまざまな場所でさまざまな形でスポーツ活動を楽しんでいる。フィンランドでは、公共の施設や学校の施設、民間の施設、ならびに、スポーツや身体活動をするために工夫された自然環境があるなかで、スポーツトレーニングセンターは、子どもや青少年のプログラムを含む市民のスポーツ活動を支えている。それはスポーツ指導者の専門的な職業能力を学ぶ職業学校を兼ね備えており、実践的に地域の人々にスポーツの提供や指導を行い市民のスポーツ生活の充実に貢献しているしくみを形成している。子どもたちの学校外におけるスポーツ活動についても、こうした環境が寄与していることがうかがわれる。今後このような点をふまえ、フィンランドにおける学校体育と学校外のスポーツ活動の連続性や関係性、ならびに子どもをめぐる諸問題と運動・スポーツ環境の結びつきについて検討することが求められる。なぜなら、それにより得られた知見が、北海道におけるへき地・小規模校の学校体育を含む子どもたちの運動・スポーツ生活のあり方を考えていく上で、示唆を与えてくれると考えられるからである。

1. はじめに

北海道においては、へき地・小規模校における教育のあり方(考え方と進め方)について検討することが求められている。そうした流れの中で、総合的な教育アプローチによる学習多様性(進学的学力のみでない学びの価値付け)を認め、子どもたちの学習を豊かにすることや幼小・小中などの接続モデルの開発や学習支援地域モデルの開発により子どもの健やかで伸びやかな成長を促進していくことへのアプローチが模索されている。また、海外におけるへき地・小規模校教育の課題と対策方法に関する調査の必要性が認められ、海外の動向を把握することで、北海道のへき地・小規模校における教育のあり方を検討する際の基礎資料を得ることも期待されている。なかでも、フィンランドについては、北海道と気候が類似していることや南部地域に人口が集中している傾向にあり、地域における人口分布に少なからず偏りがあること、特色ある教育施策とPISAにおけるリテラシーの優れた成績によって世界的に注目されていることが、北海道において深刻視されている学力問題やへき地・小規模校における教育をめぐる問題とも結びつけられることにより、重要な調査対象国の一つとして数えられる。

体育科教育の視点からは、スポーツとの豊かなかかわり

を生涯にわたり築いているヨーロッパの一国であり、身体活動と学習のかかわりの重要性が指摘され、積極的にスポーツをはじめとする身体活動の実践が促進されている国である点において注目し値するといえる^{注1)}。また、北海道では子どもの体力問題が深刻化し、それに対する打開策を模索する動きが研究・実践の両レベルにおいて現在活発化していることからフィンランドの実情を把握する意義が認められる^{注2)}。フィンランドは北海道と気候が類似しており冬季スポーツがさかんである一方で、冬場の活動も含めて子どもたちの生活習慣の変化や運動不足による肥満の問題が深刻化している点^{注3)}から北海道と子どもたちをめぐって共通の問題に直面しているゆえに、海外の動向の事例として取り上げることは意義深い。

しかしながら、日本においてフィンランドにおけるスポーツ事情や子どもや青少年のスポーツ活動の状況が現在十分に報告され研究されているとは言い難い。航空機の移動時間で言えば、ヨーロッパの中で最も近い国であるフィンランドにおける市民とスポーツとのかかわりについて、われわれは必ずしも十分な情報を持ち合わせてはいない。ましてやこの国のスポーツや学校体育に関する研究の蓄積はほとんどない^{注4)}。フィンランドにおける市民とスポーツのかかわりに関しては、例えば、北欧スポーツ研究会(1993)が北欧諸国のスポーツ状況の数回にわたる調査を

もとに『北欧のスポーツ -スポーツは共有財』（1993）として報告している中にフィンランドに関する記述があり、1990年代前半のスポーツ状況の概要を知ることができる。しかしながら、当時から20年の歳月が経過しており、その間のスポーツ事情や子ども・青少年のスポーツ活動の実態ならびに現況についての報告も十分ではないゆえ、スポーツに親しむフィンランドの人々やその社会・文化的環境の変化などに関する研究もほとんどみられない。

それだけに、住民の少ない地域の人々やへき地・小規模校に通う子どもたちのみならず、フィンランドの人々のスポーツをめぐる社会・文化的背景を全体的に把握するとともに、事例的に子どもを含む市民のスポーツとのかかわりを取り上げ分析することは、フィンランドにおける体育学習をめぐる問題や課題を把握する上で欠くことのできない手続きであると考えられる。また、それは日本のへき地・小規模校における体育学習のあり方（考え方と進め方）を考えていく際にも示唆を与え、洞察を促す資料となるように思われる。

そこで本稿では、2014年3月上旬に行った現地調査を手がかりに、スポーツトレーニングセンターを利用したスポーツ活動について北部と南部の都市を事例にその状況を報告する。そして、日本におけるへき地・小規模校に通う子どもや青少年の学校外のスポーツ活動のあり方について考える一資料を得るという観点から、フィンランドにおける子どもたちの学校外のスポーツ活動について展望するとともに、今後のへき地・小規模校における子どもたちの学校内外の運動・スポーツの学びのあり方をも射程として、フィンランドにおける子どもたちのスポーツ活動をめぐる研究テーマについて整理することを試みる。

2. スポーツ活動の拠点としてのスポーツトレーニングセンター

日本においても、ヨーロッパの国々における市民の暮らしに息づいたスポーツ活動の様子は、その国の文化や暮らしを内容とした出版物において必ずといっていいほど紹介されている。出版物の数は多くはないものの、このことはフィンランドについても例外ではない^{注5)}。フィンランドの市民が興じるスポーツには、ノルディックウォーキング、オリエンテーリング^{注6)}、フィンランド式野球のペサパッロ (pesäpallo)^{注7)}、サッカー、フロアボール (salibandy)^{注8)}、陸上競技などなど、そして言わずと知れた冬季スポーツがある。冬季スポーツでは、アイスホッケー、スケート、クロスカントリースキー、スノーボードにアルペンスキーの他、子どもたちにおいてはリングETTE (ringette) やヤーパッロ (jääpallo) といった氷上ゲーム^{注9)}、そして、フィンランド名物と言っても良い冬の野外水泳^{注10)}などがあげられる。さらに、ここにあげたスポーツに留まらずフィンランド人はさまざまなスポーツに親しみスポーツ文化を享受している^{注11)}。

こうした背景には、こうしたスポーツ活動を可能にする施設や環境があることが推察される。フィンランドには市民のスポーツ活動を支える環境としてスポーツトレーニングセンターがあり、それは人口が多い南部地域に多く認められるものの全国に整備されている。例えば、フィンランド北部のラップランド地方は確かに人口の少ない地域だが、スポーツやその他の身体活動をする上で施設に恵まれていないかといえは必ずしもそうではない。各地域には公共の施設や学校の施設、ならびに民間の施設がある。また、スポーツや身体活動をするために工夫された自然環境がある。なかでも、スポーツトレーニングセンターが地域のランドマークとなり、子どもや青少年のプログラムを含む市民のスポーツ活動を支えているようである。そして、それはスポーツ指導者の専門的な職業能力を学ぶ職業学校 (Urheiluoipisto)^{注12)}を兼ね備えている。スポーツトレーニングセンターは、スポーツ指導者の職業訓練を行う場でもあり、さらに専門的な職能を身につけるための、つまり、スキルアップの機関でもあるのである。というより、市民のスポーツ活動の保障とスポーツ指導者の養成をセットにして市民のスポーツ環境を整備しているという見方が適切かもしれない。スポーツトレーニングセンターは、スポーツ指導者のための職業教育、市民のためのスポーツ施設、宿泊施設を有した市民や観光客のスポーツ活動の拠点施設として機能しているのである。

実際、フィンランドのロードマップ (縮尺1/80,000) には、冬季スポーツトレーニングセンターのマークが示され、スポーツ職業学校の位置がウルヘイルオピスト (Urheiluoipisto) の文字の記載によって明らかにされている。道路地図であるから当然のことながら地名や人口数が示されているが、そのなかにもこうしたスポーツ情報が提供されている。このことからいかにフィンランドにおいてスポーツが人々の暮らしに根付いており、スポーツトレーニングセンターがそれを支えているかがわかる。その一方で、スポーツトレーニングセンターが商業施設の側面をもっているゆえ、経営上の戦略から道路地図に明記されているとするならば、それは頷ける点である。しかしながら、学校施設が数ある中でスポーツ職業学校が記載されていることは驚くべきことである。

3. サンタスポーツ (Santa Sport) の様子

サンタスポーツ (Santa Sport) (写真1) は、北フィンランド、すなわちラップランド地域の中心都市ロヴァニエミ (Rovaniemi) にあるさまざまなアクティビティを行うことのできるスポーツトレーニングセンターである。この施設は、運動・スポーツの職業教育とダンス教育といった職業教育の機能、地域のスポーツクラブやアスリートのためのスポーツトレーニングセンターの機能、子どもを含む市民のスポーツ活動の支援、スポーツリゾートとして国内の人々や旅行者に対する各種スポーツの提供、ならびに企

業研修施設の機能を持っている。



写真1 サンタスポーツ正面玄関

レジャースポーツのサービスとして、アルペンスキー、クロスカントリースキー、クライミング、あるいはボーリングなどがあり、各種球技の道具の貸出もある（写真2）。



写真2 室内陸上競技トラック内の球技コート

また、アドベンチャースポーツとして、スノーモービル、スノーシュー、カヌー等がある。さらに、スパサービスとして、サウナやプールの利用、水中エクササイズの教室、ならびにマッサージやセラピー、子どものプレイ施設も用意されている。サンタスポーツは、スポーツリゾートとしての特色が際立つ施設である。

視察した時は、北フィンランド地域の学校がまさにスキー休暇（hiitolaoma）に入っていたために、朝から夕方にかけて家族で施設を利用している人たちが多かった。彼らは宿泊したり、日帰りでスキーを行ったり、スパ施設を利用したりしていた。以下で市民のスポーツの様子をいくつか紹介することとする。

○室内プールにおける活動

25mの室内プールは、ガラス張りでホテルのフロントや食堂に向かう廊下からもその様子が見えるようになってい

た。コース分けされたプールでは、提供されたプログラムを行う利用者と個人の利用者が、それぞれの活動を楽しんでいた。さらにこのプールには、螺旋状のウォータースライダーとジャクジーを併設しており、屋内ゆえこれらの活動を一年中楽しめるようになっていた。

視察の際には、スキー休暇で訪れていた子どもたち向けの水泳集中プログラムが早朝から行われていた。小学校低学年から中学生くらいまでの子どもたちが、インストラクターの指導の下、練習に励んでいた。それぞれの子どものスキルの差はあるものの、与えられた練習メニューを一生懸命こなし、泳力を伸ばそうと泳ぎ込んでいた。

このような事前の申し込みを必要とするプログラムの他に、夕方の時間帯には水中エクササイズのような、申し込みを必要としない無料プログラムも提供されている。参加しているのはほとんどが年配の女性であった。ある女性は、このロヴァニエミ市に引っ越してきてからほぼ毎日、水中エクササイズに参加しているとのことであった。また、宿泊利用している市民の中には、子どもをウォータースライダーで遊ばせておいたり、子どもをプレイルームのインストラクターに預けたりして、このエクササイズに参加している市民もいた。こうした様子から、子どももたちが、そして保護者が子どもとともに手軽に利用できる地域に根ざした施設であることがうかがえた。

○サウナ健康法

更衣室からプールに移動する間には、数十人が入れる大型のサウナが、男女の更衣室それぞれに設置されていた。各家庭のお風呂にはバスタブがなくてもサウナとシャワーはあるという、フィンランドにおいてサウナは極めて日常的で生活のなかに深く浸透した設備である。

サウナの使用に関しては、施設に着くなりすぐサウナに向かう人もいれば、プールで泳ぎ終わった後やトレーニング後に利用する人もあり、それぞれの目的によって使い分けられているようであった。

このサウナと日本の乾式のサウナとの違いは、サウナの熱源となっている焼け石に水をかけ、水蒸気を立ち上げていることである。この熱い水蒸気に慣れていない者にとっては、とても息苦しく感じる。しかし、フィンランドの人々は、子どもからお年寄りまで何食わぬ顔で利用しており、それぞれサウナを堪能していた。サウナの使用については、父親らが子どもたちに教えている場面もみられた。

○陸上競技場における活動

スポーツ施設としてのサンタスポーツのスケールの大きさは、室内陸上競技場が整えられている空間内に各種スポーツを行うことのできる場が完備されていることから容易に理解できる（写真3、4）。この施設においては、一般市民に対するスポーツの提供のみならず、アスリートたちの練習拠点としても充分機能し得るつくりになっているのである。



写真3 陸上競技トラック脇の体操競技練習場



写真6 棒高跳びピット



写真4 陸上競技トラック内のトランポリン練習場

北海道には、日本女子短距離の第一人者である福島千里選手が練習をしているハイテクACの室内陸上競技場（恵庭市）がある。その規模は、130mの直走路が5レーンあるという程度である。それに対してサントスポーツは300mの曲走路、走り幅跳び・三段跳びの砂場を有し、走り高跳び・棒高跳びのマットも常設されていた（写真5, 6）。また、投てき競技に関しては砲丸投げ、円盤投げやハンマー投げの練習もできる設備が整っていた。



写真5 陸上競技場直走路部分と球技コート

調査時には、高校生数名のクラブメンバーによる個人練習が行われ、スタートの練習をしていた選手や走り幅跳びの練習をしていた選手が、それぞれのトレーニングメニューをこなしていた。選手たちは、極寒の冬であっても夏場と同じようにスパイクシューズを履き、Tシャツとランニングパンツで活動ができていた。当然のことながら、通常の屋外の陸上競技場であれば、活動のためにマットを準備し、活動後には片付けなければならない。しかし、ここではそのような手間が省け、活動時間を充分確保することができる。クラブのメンバーはジュニアからシニアまで多世代にわたり、小学生の競技会（記録会）等も日常的に行われているようであった。

4. パユラハティ（Pajulahti）の様子

パユラハティ（Pajulahti）は、首都ヘルシンキ（Helsinki）から車で1時間ほどの距離に位置するラハティ（Lahti）市からなお車で15分ほどのナストラ（Nastola）にあるスポーツトレーニングセンターである（写真7）。



写真7 パユラハティ体育館

この施設は湖の畔にあり、豊かな自然を感じることのできる環境に位置している。はじめに概要についてパユラハ

ティのパンフレット及びホームページに基づいて若干紹介する。

パユラハティは、1929年に創設された女性体操家たちの夏季トレーニング場がもとになっており、最近10年の間にアクティブスポーツ・レジャーセンターとして規模を広げた。この施設は、運動・スポーツに関わる職業教育、コーチングのトレーニングセンター、レクリエーションスポーツとビジネスに対するサービスを展開している。

運動・スポーツに関する職業教育とは、運動・スポーツやコーチングに関する職業資格教育や、障がい者スポーツにかかわる職業教育が行われる。それは指導スタッフのもとで実践を通して、実際のさまざまな業務を見習い体得していく、いわば徒弟教育として行われる。トレーニングセンターとしてナショナルスポーツチーム、10の競技スポーツ団体、地域のスポーツクラブ、アスリート個人を支援している。フィンランド、ならびに外国のトップアスリートやチームが大きな大会やトーナメント前の調整のためにパユラハティを利用している（写真8）。調査時には、フィンランド女子柔道代表選手が練習を終え、帰宅するところであった。館内にはナショナルチームの柔道着がハンガーに掛けられ並べられていた。



写真8 体育館内柔道練習場

そして、ビジネスサービスとしては、ビジネス会議や企業研修の場を提供している。具体的には、レクリエーションスポーツのイベントや自然の中でのコンディショニング、各種セミナーを開催している。

こうした施設において、一般の人々や子どもの運動・スポーツ教室、そして休日のみならず市民に日常のスポーツ活動の場を提供したり、指導を行ったりしている。また、アスリートのためのスポーツトレーニングの場としても重要な役割を担っている。土曜日に調査したこともあり、子どもから大人までさまざまなスポーツ活動に励んでいた。

○子どものレスリング教室の様子

レスリング場では、施設内のレストランで昼食をとった子どもたちが、レスリングの練習前にフットサルをして遊

んでいた。その子どもたちもインストラクターが来て、午後のプログラムが開始される頃には、指示されることなくフットサルをやめ、レスリングの準備をしていた（写真9）。



写真9 レスリング教室の子どもたち

参加者は小学生の子どもたちであり、教室は昼食をはさみ午前も行われていた。準備が終わると、子どもたちは基礎トレーニングを目的とする練習ではなく、相手と組み合わせることを主とした昼食後の練習を楽しそうに行っていた。

○子どものフットサルチームの様子

このホールは室内陸上競技場となっているが、中央部のフィールドは人工芝になっており、サッカーの練習に使用されるようにラインが引いてあった。

この施設は、主に団体使用をされるため、サッカーのクラブチームなどが練習に訪れる。この日は少年たちがフットサルを練習しており、ミニコーンをたてて、パスやドリブルの練習をしていた（写真10）。



写真10 フットサルの練習をする子どもたち

フィールド内は団体貸し切りが多く、周囲のトラックは陸上競技の練習のために、個人で使用している場合が多いようだ。この日も陸上競技の練習に訪れていた選手はいたが、奥の方で活動していたため、その内容が確認できなかった。

た。

○ボクシング教室の様子

子どものレスリング教室の横では、大人のボクシング教室が開かれていた。男女合わせて20人弱くらいの規模であった。インストラクターが、サンドバックにパンチの打ち方を示範し、その後に参加者を順番に打たせ、その行い方についてアドバイスをしていた(写真11)。



写真11 大人のボクシング教室

ここでのインストラクターは、プロボクシングの経験者もしくは、プロボクシングを目指していたという本格的にボクシングに取り組んだ人達であった。

最近日本においては、競技としてあるいはダイエットを目的としてボクシングジムに通い行っている人々が増えていく様子がたびたび紹介されている。日本においても活動する人が増えているボクシングに関して、フィンランドではボクシングジムではなく、こうした地域のスポーツトレーニングセンターでも格闘系のスポーツを経験することができるというのが特色といえる。

○ティラピスの様子

ティラピス教室では、この施設内の託児所に子どもたちを預けている地域の母親が、多く参加しているとのことであった。それはこのプログラムが無料で提供されており、地域の方々が気軽に参加しやすいものであることに起因している。

20名ほどの参加者がGボールを利用した運動を行っており、どの参加者も心地よさそうに活動していた。参加者は幼い子を持つ母親から高齢の女性まで、様々な年代にわたっていた。インストラクターは丁寧に参加者に声をかけ、和やかな雰囲気の中で皆が運動を楽しんでいた。

○湖での水泳

この施設の前にある湖では、いつでも入水できるように湖畔にはアプローチがあり、使用区域だけ氷が割ってある(写真12)。



写真12 湖で泳ぐための出入口としてのスロープ

この日は使用している人はいなかったが、湖であってもいつでも使用できるように管理されている。また、更衣室にはサウナが設置されている。もちろん、サウナのみの利用も可能である。

5. まとめ

フィンランドの各地域には公共の施設や学校の施設、ならびに民間の施設があり、スポーツや身体活動をするために工夫された自然環境もある。なかでも、スポーツトレーニングセンターは地域のランドマークとなり、子どもや青少年のプログラムを含む市民のスポーツ活動を支えている。そして、それはスポーツ指導者の専門的な職業能力を学ぶ職業学校(Urheiluoipisto)を兼ね備えており、実践的に地域の人々にスポーツの提供や指導を行い市民のスポーツ生活の充実に貢献するしくみを形成している。

こうしたスポーツ環境を有するフィンランドに関して今回の調査では、スキー休暇のような社会の枠組みとしてスポーツを生活に取り込んでいく仕組みが整備・活用されていることが確認された。実際、子どもたちのスキー休暇に合わせ、親が休暇を取ることが一般的に認められて、おり気兼ねなく有給を取ることのできるフィンランドでは、親子での運動参加の機会を保障し、家族で運動に親しむ環境が整備されており、子どもたちの運動生活の日常的な姿を生み出している。

また、スポーツ職業学校が市民のスポーツ生活を支え、子どもの学校外におけるスポーツ活動の充実に寄与していることが調査を通して認められた。さらに、スポーツの拠点となる施設も充実しているが、そればかりではなく冬でも川や湖の冷水の中で泳ぐことを、日常生活に取り込んでいる人々の存在をうかがい知ることができた。もちろん、ここに報告するまでもなく公園では、ノルディックウォーキングやジョギングをしている人も多く、日常的に至る所で運動をしている人を見かけることができた。こうした日常における市民とスポーツのかかわりが、子どもを運動に誘う雰囲気を作りだし、少なからず影響を与えているのでは

ないかという点が推察された。

玉井 (2013) は、「へき地小規模校であるがゆえにできない教育活動をとらえるよりも、へき地小規模校でできる教育活動や教材内容を積極的に伸ばしていくことが、へき地の子どもの自信や社会性につながっていく」(玉井, 2013, p.1) として、へき地性・小規模性の特性を活かしたカリキュラム開発の必要性を説く。こうした観点に立ち、学校カリキュラムの開発、ないしはデザインを促すことは大切である。そうした点に加えて、地域における子どものスポーツ生活を学校体育のみならず、学校外のスポーツ活動も含めて考えていくことが、へき地性・小規模性という点からも、そして単に学校のみ子どもたちの豊かな学びの可能性を完結するのではなく、家庭や地域との結びつきの中でより充実した子どもたちの学びを保障していくという観点からも重要であると思われる。それゆえ、今後フィンランドにおけるスポーツトレーニングセンターと学校体育の関係性や地域環境を活かしたスポーツ活動と学校体育の取り組みの連続性、もしくは関連性に焦点を当てて分析することは意義のあることと考えられる。

また、子どもの健やかで伸びやかな成長という視点から、フィンランドにおける子どもの肥満をめぐる問題と地域のスポーツ環境、子どもの学力をめぐる問題と運動・スポーツ生活の関係に関する研究は、北海道における子どもの体力・運動能力をめぐる問題を背景として、へき地・小規模校の体育学習やカリキュラムの検討を行う上で基本的な立場を明確にすることや、カリキュラムをデザインする原理を考えることに、手がかりを与えてくれると考えられる。

さらには、フィンランドにおけるスポーツトレーニングセンターが子どものスポーツ教育に果たす役割、家族のスポーツ生活と子どもの運動・スポーツ生活の結びつき、ならびに市民スポーツ活動が子どもの運動生活に与える影響等に関する研究は、へき地地域における教育基盤としての学校における体育の役割を考えていく上で、参考になる知見を与えてくれるのではないかと。また、サフラ (2006) は、へき地の学校における機能は、生徒の特定のニーズを満たすために設計された機能と地域社会の発展における学校の役割に関する機能といった角度から研究され得るとしている (サフラ, 2006, p.111) が、地域のスポーツ活動の拠点である、スポーツトレーニングセンターの役割の分析から学校の機能について浮き彫りにするという、いわば逆照射という意味においても、学校外のスポーツ環境について研究テーマとすることは意義のあることと考えられる。

加えて、フィンランドにおける地域に根ざしたスポーツ職業学校に関する研究や、スポーツ職業学校のカリキュラム研究、スポーツ職業学校と近隣の小中学校とのネットワークに関する研究を進めていく中で得られる知見は、北海道における小規模校の子どもたちの学校内外のスポーツの学びの連続性や関連性を考えていく上で少なからず示唆を与えてくれるように思われる。

注

- 1) フィンランドでは、子どもの肥満やその一つの要因とされる運動不足の問題が深刻化している状況下で、『身体活動と学習』(2012)というタイトルの報告書が出されている。これは、フィンランドの国家教育委員会から英訳された要約 (Finnish National Board of Education, 2012) も公表されている。それによると、2008年から2011年の間に発表された子どもの学習や学力と身体活動の効果に関する研究結果に基づいて、学力や認知機能、ならびに授業における身体活動の効果を述べ、教師、他の指導スタッフ、自治体の教育担当者等に向けて身体活動を増加させるための手がかりを提供している。
- 2) 例えば、北海道の子どもの体力・運動能力をめぐる最近10年の研究には、佐藤他 (2005)、須田他 (2011)、志手他 (2012)、神林他 (2013)、中島他 (2013) 等の研究がある。
- 3) 例えば、ドイツにおける定期刊行物『sportunterricht』でもヨーロッパの国々における子どもの肥満、ならびにその要因の一つであるメディアの利用の問題が取り上げられ、そこからフィンランドについても深刻であることがうかがえる (Brettschneider, W.-D., 2005; Bünemann, A., 2005)。また、フィンランド放送のウェブサイト上の英語ニュースの記事からも子どもの肥満をめぐる問題の深刻さを読み取ることができる。
- 4) フィンランドの学校体育についても、西垣 (1998) の学校体育・スポーツの歴史と概要の紹介、入口・井上 (2009, 2010) のヘイキナローヨハンソンとテルマ (2005) による、フィンランドにおける体育の現状に関する報告の紹介、長見 (2014) のフィンランド視察の記録としてのフィンランドの体育事情に関する概略の紹介がある程度であり、概要の紹介の域を出ない。また、フィンランドの保健科をめぐる問題については浜 (2013) の研究があり、このテーマに関しては今後の研究の蓄積が期待されるところである。
- 5) 例えば、堀内 (2008)、イルッカ・タイバレ (2008)、百瀬宏・石野裕子 (2008) 等においてフィンランドにおける市民とスポーツとのかかわりが記述されている。
- 6) 地図とコンパスを使って野山の中に設置されたポイントをスタートからゴールまで順序通りに通過しその所要時間を競うアウトドアスポーツである。総合学校における1-4学年 (日本の小学1-4年生に当たる) の主たる内容の中には自然環境における運動があり、自然の中での行動や地図の使い方の理解が、5-9学年 (日本の小学校高学年と中学生にあたる) の主たる内容にはオリエンテーリングと明記され地図とコンパスを用いてオリエンテーリングを行う方法の理解が評価基準として示されている (Opetushallitus, 2003,

2004)。また、市民スポーツとして、夏の日が長いフィンランドでは6月あたりからはほぼ毎晩オリエンテーリングの競技会が開催されるという。

- 7) このゲームは、1920年代にラウリ・タフコ・ピヒカラによって開発された、伝統的なボール打つチームゲームと北アメリカのベースボールを組み合わせたものである (Gelhild,T.L., 2012, p.3)。時代とともにこのゲームは変化しフィンランドにおいて人気のスポーツになっている。1952年のヘルシンキ開催の夏季オリンピックでは、公開競技とされ、2009年時点で、フィンランドにおけるプロのプレーヤーは、15,000人を越えている (Gelhild,T.L., 2012, p.4)。体育の授業においても中等段階における球技の学習内容として、例えばユバスキュラ大学の附属学校においてもペサパッコは男女共通に取り上げられている (Richter,C., 2006, pp.257-258)。
- 8) saliは、フィンランド語で床を意味し、bandyは英語でフィールドホッケーに似た古い方の球技を意味する言葉である。その合成語がフィンランド語ではフロアボールというスポーツを表している。プラスチックの穴あきボールとプラスチックのブレードにカーボンのシャフトを備えた専用のスティックでプレイするフィンランドにおいて若者に人気のスポーツである。後期中等段階の体育のナショナルカリキュラムをみると、中核内容としてスティックゲームが位置づけられている (Opetushallitus, 2003)。フロアボールも体育の授業で行われる。また、地域のクラブにおける活動としてフロアボールは盛んに行われている。
- 9) リンゲッテは、アイスホッケーに類似した氷上ゲームであり、アイスホッケーのスティックではない、長い棒状のスティックとドーナツ状のゴムのパックを用いて行う。地域のクラブにおいて特に女子のスポーツとしてさかんに行われている。体育の授業でも総合学校の中等段階ならびに後期中等段階において取り上げられている種目である (Richter,C., 2006, pp.257-258)。また、ヤーパッコは、アイスホッケーとサッカーを組み合わせたいわゆるクロスオーバースポーツである。これも若者の地域のクラブにおいて行われているスポーツ種目の一つであるようである (中田綾子, 2008, p.270)。
- 10) 例えば、タンペレ市には川岸に更衣室小屋があり川に入る階段、救命用の浮き輪が設置され、コースロープで囲われた公共の野外水泳場があった。他にもパユラハティには、湖岸に更衣室とサウナを完備した小屋があり野外水泳場として整備されていた。
- 11) F1やラリーといったモータースポーツ、アイスホッケーのプロリーグなど観たり、応援したりすることも盛んである。スポーツヘルシンキにあるスポーツ博物館には、例えば、フィンランドでは特に有名なスポーツヒーロー、アイスホッケーのヤリ・クッリ、スキー

ジャンプのマッティ・ニカネン、F1のミカ・ハッキネンの使用グッズと経歴がディスプレイされている。

- 12) 本稿では、ウルヘイルオピストについて、その機能を明示するという立場から、スポーツ職業学校と表記することとした。尚、フィンランドの後期中等教育は、ルキオ (Lukio) と呼ばれる日本における、いわゆる普通科教育の高校と職業学校がある。フィンランドにおいては、職業学校ではない普通科教育の高校としてのスポーツ学校も存在する。それはウルヘイルルキオ (Urheilulukio) と称されるスポーツ学校 (ルキオ) である。このなかには普通科の中にスキーやアイスホッケーの課程がある学校もある。

謝辞

本研究はHATOプロジェクト (へき地・小規模校に関するプロジェクト) の支援を受けて行われたものである。また、本研究に関して、メリカント・ペッカ氏 (スポーツコーディネーター・元全日本ノルディックチームジュニアコーチ)、高橋直博氏 (J Fデザイン社)、カイ・アンドレーセン氏 (元青年会議所役員) にご協力をいただいた。ここに感謝の意を表したい。

文献

- Brettschneider,W.-D., Bünemann, A. (2005) Übergewicht : Zunehmendes „Markenzeichen“ der jungen Generation Ganztagschulen als Chance für eine gesunde Entwicklung. sportunterricht, 54: 73-77.
- Bünemann, A. (2005) Mediennutzung im Heranwachsendenalter –Ursache für steigende Übergewichtsprävalenzen? sportunterricht, 54: 362-367.
- Finnish National Board of Education (2003) National core curriculum for upper secondary schools National core curriculum for general upper secondary education intended for young people 2003. pp.209-212.
- Finnish National Board of Education (2004) National core curriculum for basic education 2004 National core curriculum for basic education intended for pupils in compulsory education. pp.245-248.
- Finnish National Board of Education (2012) Physical Activity and Learning Summary. Status Review October 2012.
- Gelhild,T.L. (Ed.) (2012) Sport in Finland Finland, Sport, Cultur, National, Pesäpallo, Ice Hockey. Polic, pp.3-8.
- 北欧スポーツ研究会編 (1993) 北欧のスポーツ –スポーツは共有財-. 道和書院 : 東京.

- 堀内都喜子 (2008) フィンランド 豊かさのメソッド. 集英社 新書:東京.
<http://www.pajulahti.com>
<http://yle.fi/uutiset/parents blind to kids obesity/6274706>
<http://yle.fi/uutiset/chubby kids at risk of becoming heavy adults/6101205>
- 入口豊・井上功一 (2009) フィンランドの体育カリキュラム改革 (I). 大阪教育大学紀要 第V部門, 58-1:57-68.
- 入口豊・井上功一 (2010) フィンランドの体育カリキュラム改革 (II). 大阪教育大学紀要 第V部門, 58-2:65-75.
- イルッカ・タイパレ編 (山田真知子訳) (2008) フィンランドを世界一に導いた100の社会改革 フィンランドのソーシャルイノベーション. 公人の友社:東京.
- 神林勲・森田憲輝・奥田知靖・中道莉央・石澤伸弘・小野寺夕香・高橋正年・山形昇平・朝倉潤・溝口仁志・榎山聡・中島寿宏・志手典之・新開谷央 (2013) 北海道の中学生における積雪寒冷期間前後の体力・運動能力. 北海道教育大学紀要 (教育科学編), 63 (2):31-39.
- 小浜明 (2013) フィンランドが育てようとしている保健科の学力-『保健科目』が大学入学資格試験にある国. 日本体育学会大会予稿集 (64), pp.338-339.
- 百瀬宏・石野裕子 (2008) フィンランドを知るための44章. 明石書店:東京.
- 長見真 (2014) フィンランド視察記 フィンランドの体育事情. 体育科教育, 62-2:74-75.
- 中島寿宏・高瀬淳也・森田憲輝 (2013) 積雪寒冷地域における小学校児童の身体活動を促す教師の「しかけ」. 北海道体育学研究, 48:67-73.
- 中田綾子 (2008) フィンランドのスポーツ 実践者が語る. 百瀬宏・石野裕子, フィンランドを知るための44章. 明石書店:東京, pp.268-272.
- 西垣完彦 (1998) フィンランドの学校体育・スポーツ. 愛知県立芸術大学紀要, 28:63-79.
- Opetushallitus (2011) Liikunta-alan Tutkinnot Suomessa 2011. (http://www.edu.fi/download/132697_liikunta_alan_tutkinnot_suomessa_2011.pdf.)
- 玉井康之 (2013) 北海道のへき地の地域性を活かした地域教材開発とカリキュラム開発の必要性. へき地教育研究, 68:1-12.
- Richter,C. (2006) Konzepte für den Schulsport in Europa Bewegung,Sport und Gesundheit. Meyer & Meyer:Aachen, pp.218-275.
- サフラ:佐藤有・成富澄男訳 (2006) OECD諸国におけるへき地地域の教育基盤. へき地教育研究, 61:105-115.
- 佐藤学 (2005) フィンランドの教育の優秀性とその背景 - PISA調査の結果が示唆するもの-. 教育科学研究会編, なぜフィンランドの子どもたちは「学力」が高いのか. 国土社:東京, pp.34-43.
- 佐藤毅・岡崎勝博・菅原恵・造田哲也・北澤一利・小沢治夫 (2005) 道内中学生の生活・健康・体力に関する実態査. 釧路論集, 37:89-94.
- 志手典之・森田憲輝・長平奈々・奥田知靖・石澤伸弘・高橋正年・山形昇平・朝倉潤・溝口仁志・榎山聡・神林勲・新開谷央 (2012) 北海道の小・中学生における降雪期後のリバウンドジャンプ遂行能力の低下. 北海道体育学研究, 47:15-20.
- 須田力・石本敬志・中村桂子・長浜光弘・西垣孝・水野眞佐夫 (2011) 子どもの雪上サッカーの有酸素トレーニング効果. 北海道の雪氷, 30:17-20.
- Syväoja,H.,Kantomaa,M.,Laine,K.,Jaakkola,T.,Pyhältö,K.,Tammeln,T. (2012) Liikunta ja Oppiminen.Tilannekatsaus Lokakuu 2012.